

リオオリンピック・スタディツアーの実践報告 A Report on Tokyo University of Foreign Studies Study Tour at the Rio Olympics and Paralympics

鶴田 知佳子

TSURUTA Chikako

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. スタディツアーの設定と研修内容
 - 1.1. スタディツアーの設定と応募者の選抜
 - 1.2. スタディツアーの事前研修
 2. 運営上の問題と対応策
 - 2.1. 治安対策と安全管理
 - 2.2. ボランティア通訳者とは
 3. 達成された成果
- おわりに

キーワード：ボランティア、通訳、オリンピック

Keywords：volunteer, interpreting, Olympics

【要旨】

本稿は、東京外国語大学の短期海外留学授業の一つである「スタディツアー」として企画された「リオオリンピック・スタディツアー」の実践報告である。オリンピックに 17 人、パラリンピックに 9 人がボランティアとして参加した。事前学習においてオリンピック用語、通訳の心構えと通訳ロールプレイなど、研修を行った。学生はオリンピック村やメインプレスセンターなどの施設、競技会場に配属され、それぞれの配属先で英語を使つてのコミュニケーションに貢献した。報告会においては、多国籍で働く中で自ら積極的に動くことの大切さ、国際的な場で英語を使つて仕事をする自信を得たなど、成果があげられた。

留学を多数手がけている蓄積があつてこそ、学生を安全に派遣することができた。コミュニケーションを円滑に行うために言語と文化の壁を越えるのを助ける人材の育成をする上で、今回のスタディツアーのように多数国・地域が参加するイベントにおける言語支援が有効であることが確認された。



The aim of this article is to provide an overview on how student volunteers from Tokyo University of Foreign Studies (TUFS) conducted their activities and learned from Study Tour Program to act as volunteers including interpreting for the 2016 Rio Olympics and Paralympics. 17 students participated in Rio Olympics and 9 in Rio Paralympics as volunteers from TUFS.

This article outlines how the recruiting and selection was done for TUFS volunteers, the issues encountered in the time leading to Rio Olympics and Paralympics games, and what students felt they accomplished as a result of this experience.

The students were able to achieve their objectives to get firsthand experience by directly participating in multinational sport events, and gained confidence in working in an international environment using English.

As conclusion it is this author's opinion that Study Tour was conducted successfully due to much accumulated experience of TUFS in sending students abroad. Another important finding is that firsthand experience at multinational sport events is invaluable and universities should continue to provide students with such opportunities whenever presented.

はじめに

日ごろから通訳を教える授業を東京外国語大学において行っている筆者のもとに、2016年2月にロンドン在住の知人である西川千春氏より、リオオリンピック・パラリンピックにおける大会ボランティアの語学サービスの人員が不足しているとの情報がもたらされた。西川氏はすでに複数回、オリンピック・パラリンピックでのボランティアを務めており、ボランティア関係者のなかで知られた存在であった。リオオリンピック・パラリンピック組織委員会から、西川氏に問い合わせがあったのが今回の「リオオリンピック・スタディツアー」を企画する始まりであった。リオオリンピック・パラリンピックのボランティアはすでに2015年12月に応募が締め切られて選抜が終わり確定していたが、日本語のボランティアが少ないため、東京外国語大学の学生で関心のある者に急遽、設ける特別枠で応募してもらいたいという相談だった。それを受けて、東京外国語大学の短期海外留学の一つのスタディツアーとしてリオオリンピック・パラリンピックにボランティアを派遣することとした。本稿はその実践報告である。

東京外国語大学では、『TUFS 留学案内 2017』にあるように4学期制における1学期以上の期間の留学を「長期海外留学」として定義し、夏学期・冬学期に行う留学や、学期中に大学が行うプログラムによる留学を「短期海外留学」と定義していて、長期海外留学と短期海外留学をあわせて8つのタイプの留学がある。東京外国語大学では2016年度には全学生3,858人の35パーセントにあたる1,365人(長期留学782人、短期留学583人)が留学を経験した(経験者

は、2016 年度に帰国した者、出発した者両方をさす)。長期海外留学には東京外国語大学との学生交換の枠組みで東京外国語大学の協定校に派遣される「交換留学」、休学して留学して単位認定の申請を行う「休学留学」、休学して留学するが単位認定の申請を行わずに留学する「自由留学」、および休学して海外でインターンシップを目的とする場合で、2014 年から始まった国際交流基金による「日本語パートナーズ」による派遣を含む「長期インターンシップ」の 4 種類がある。短期海外留学には、夏学期・冬学期に海外の協定校に留学する「ショートビジット」、協定大学との共同教育や海外での学修体験の獲得を目的に東京外国語大学や他の公的機関が実施するプログラムに参加する「スタディツアー」、東京外国語大学のグローバル・キャリア・センターが実施する海外での短期インターンシップに参加する「短期インターンシップ」および日本語教育を学ぶ学生が海外で行うインターンシップである「日本語教育インターンシップ」の 4 種類がある。

スタディツアーとは、1 年生から 4 年生まで全学生が履修することが出来る世界教養プログラムの一つである。「世界教養プログラム」とは、グローバル化時代を生きるために必要な基礎的教養を身につける言語文化学部・国際社会学部共通のカリキュラムで、地域言語科目・GLIP(グローバル人材育成言語教育プログラム)英語科目・教養外国語科目からなる「言語科目」、「地域科目」、「教養科目」に分類される(東京外国語大学ホームページより)。スタディツアーの一つとして、国際機関に勤務経験がある教員がジュネーブの国際機関におけるプログラムを開催していたという前例があった。また筆者は世界教養プログラムの一環として、知人の運営する KIP(Knowledge Investment Programs)アメリカ研修をスタディツアーの一つの授業に組み込み、実施した経験があった。

リオオリンピック 2016 は 2016 年 8 月 5 日から 21 日であるが、その前の 7 月末からの準備期間およびオリンピックのあとのパラリンピックの期間である 9 月半ばまでを通じて、往復を含めて最低 2 週間をボランティアにたずさわることで企画できると考えた。国際的なスポーツイベントに参加できるという「経験」を学生に与えることができるまたとないチャンスであり、2020 年に予定される東京オリンピックに向けて、本学としても学生の活動についての経験を得られる場であるという判断もあった。

1. スタディツアーの設定と研修内容

1.1. スタディツアーの設定と応募者の選抜

リオオリンピック・パラリンピック組織委員会の語学サービスからのボランティアが不足しているとの問い合わせが入った西川氏からの連絡を受け、東京外国語大学の世界教養部会に急遽、2016 年 2 月初めに授業開設の申請を出し、以下のように授業としての開設が決まった。

- ・開設授業名 「リオオリンピック・パラリンピックにおける通訳ボランティア」
- ・開設科目 世界教養科目「短期海外留学科目」
- ・開設学期・時限 2016年度夏学期
- ・担当者 鶴田 知佳子

授業の目標としては、オリンピックという国際的なイベントに主体的・実践的なボランティア活動を通じて参加し、貢献することによって、国際イベントの運営に関する理解を深め、コミュニケーション能力を高めることを中心にすえた。単にリオ2016オリンピック・パラリンピックの期間中のボランティア活動に参加するだけではなくて、参加する前の説明会に出席し、事前準備の授業に出席してリオオリンピック・パラリンピックや現地事情、通訳の心構えやインタビュー通訳のロールプレイを通じての学習、および帰国したあとにA4用紙に3枚程度の報告レポートを提出し、およびボランティア参加報告会での発表など事後活動を含む授業として設定した。評価は、事前準備の授業および帰国後のレポートと発表を通して総合的に行うこととした。

言語コンピネーションとしては、英語と日本語、英語と韓国語、ポルトガル語と日本語の組み合わせが必要であるとリオオリンピック・パラリンピック組織委員会から知らされていたのでその三つの言語の組み合わせに対して、スタディツアーとしての募集をした。応募は大学のホームページからエントリーフォームを通じて行うものとした。エントリーフォームでは、次の項目を問うている。名前、所属サークル、出身地、ボランティア活動の経験、パスポートを所有しているかどうか、現住所、電話番号、携帯電話、健康状態、血液型、海外渡航経験、および未成年の場合には保護者の連絡先と応募への承諾があることを確認した。応募に關しての情報としては、1. 英語能力、2. 自己の長所と短所、3. 高校・大学時代の活動・リーダーシップをとったこと、4. 応募理由(200字以下)を記入することとした。

上記の中で英語能力については、TOEIC800点以上を基準とした。ポルトガル語と韓国語については、会話ができる運用能力があることと短期留学を含む留学経験があることとした。応募の条件の中で満たしていないと参加できないとしたのはこの語学の条件のみである。他の項目はあくまで、大学の授業として参加する学生がどのようなプロフィールであるのか、把握するためである。ボランティア経験や海外渡航経験、高校・大学時代にどのような活動を行い、リーダーシップをとったことがあるのか、という問いは、多国籍・異文化の環境で活動ができるのかを授業担当者が把握するために有用であるが、この内容によって授業担当者が応募者を審査し選抜をしたというわけではない。リオオリンピック・パラリンピック組織委員会から、最大で東京外国語大学からは30名程度と言う人数の目安は示されていたが、大学では募集はする

ものの選抜は後日、リオオリンピック・パラリンピック組織委員会が行う選考過程に委ねられた。

なお、応募を募る上で明記したが参加費用として航空運賃等の自己負担が生じる。航空運賃は大手旅行社との相談において、オリンピック、パラリンピックともに集団で行動して、安全確保をはかれるようにした。他の短期留学の形態であるショートビジットなどと同様に海外障害保険に加入することを義務づけた。これは、授業として運営する上で外すことができない重要な条件である。後述するように、リオでの治安状況に不安があったため学生が安全に参加しているのが確認できるように東京外国語大学の留学生課が設けている「ただいま留学中」という海外渡航情報システムを通じて、緊急時の安否確認ができるようにした。授業として運営するためには、学生が安全に過ごすことができるのが前提で、そのためには保険や安全確認体制が不可欠である。

2016 年 2 月 29 日月曜日が応募締め切りであったがホームページでの募集に対し、60 名近くが応募した。ホームページからこのように応募ができることは、学生全員にメールを通じて通知が行われていた。応募したのはほとんどが英語と日本語の組み合わせで、英語と韓国語の組み合わせでは 3 名、ポルトガル語と日本語の組み合わせでは 5 名であった。応募者の中には留学中のため授業としては応募できない、東京外国語大学が学部改編を行った後の言語文化学部あるいは国際社会学部ではなく、改編以前の外国語学部所属の学生は応募対象にならないという場合もあった。そういう場合には、スタディツアーの枠組ではなく、リオオリンピック・パラリンピック組織委員会に直接、応募をするよう指示をした。東京外国語大学以外からの応募としては、最初に紹介してくれた西川千春氏から聞いて応募したロンドン在住者などがあった。

このように、この時点での留学生で応募した人たちは、一度西川氏からリオオリンピック・パラリンピック組織委員会のフェルナンダ・ポルト氏に推薦をしてそのうえでオンライン登録をしてもらった。みな、西川氏が紹介した知人として応募したということになる。

応募者が記載したプロフィールによって大学で受け付けた時点で応募した中から選抜することとはしなかったが、参考情報として出してもらったところから見る限り、東京外国語大学でボランティア活動を統括しているボランティア活動スペース (VOLAS) を経由して紹介を受けた東京マラソン 2016 多言語ボランティアに参加した者、英語研究会 (ESS) の観光ガイド活動をしている者、武蔵野市国際交流協会、NGO である Habitat for Humanity を通じて海外での住居改善活動に参加した、などのボランティア経験があげられた。さらに、希望として国際機関で将来働きたい、とする者も複数名あった。

授業を履修するには、リオオリンピック・パラリンピック組織委員会とのウェブ会議システ

ムを通じての面接に合格が条件となった。同組織委員会の担当者であるフェルナンダ・ポルト氏と相談を重ねつつ、スタディツアーとして運営する上で共通して理解しておくべき事項の確認を行った。リオと東京は12時間の時差があるため、スカイプで現地の夕方（東京の朝）もしくは現地の朝（東京の夕方）に連絡を頻繁にとった。滞在中の宿舎の確保、ボランティアとしての勤務は原則6日勤務のあとは一日休日が与えられるなど、ボランティアの環境についての基本的な点を確認した。面接の時間設定を3月前半の4日の特定の時間を設けて、面接希望をする時間枠に申し込むように指示をした。当初の応募人数が60名近くと多数に上った中から、事前事後の学習が出来るなど授業履修者としての条件を満たす者の面接は、曜日と時間を特定していくつかの枠に分けた中で、グループ5名程度でウェブ会議システムを使って面接が実施された。

選抜にあたり、リオオリンピック・パラリンピック組織委員会として語学ボランティアに求める条件を聞いたところ、自らコミュニケーションをとれる積極性がある、英語での会話を行うコミュニケーションに問題がないとポルト氏が判断できるということであった。

このように、応募が学内で受け付けられた後、個人の責任においてリオオリンピック・パラリンピック組織委員会のフェルナンダ・ポルト氏とのグループ面接を受けた。この時点で、60名近かった者が38名に絞られた。上述の授業として履修するための条件に合わなかった場合、あるいは面接の期間が3月前半の4日に限定して設定されたために、他の予定と重なって指定時間内に面接を受けることが出来なかったという場合もあった。そのあと、ポルト氏がボランティアとしてふさわしいと判断した者に順次、現在のようにテロが心配される国際情勢の中では、ブラジルに入国する際に安全保障上の脅威ではないとの **security clearance** をリオ警察から受けねばならない。この手続きは、リオオリンピック・パラリンピック組織委員会とは別個におこなわれるもので、警察が独自の審査基準に基づいて国際的な要注意人物にされていないことを確認するという作業であると聞いている。**security clearance** が出るのは必ずしも面接の順番が早かったものではなかった。警察からの **security clearance** が出た確認がされてからはじめて、オリンピックとパラリンピックのいずれかに配属されるかが決められた。応募者にとっては待ち遠しい時期であった。最終的には面接を受けた者は全員 **security clearance** を得ることが出来たが、結果が出る前に後述するような諸事情から辞退する例があった。配属先については MPC(メインプレスセンター) もしくはオリンピック村といった競技会場以外の言語サポートを必要とする場への配属、あるいは **functional area** とよばれる競技別の会場への配属があった。いずれの場合にも、応募した学生は配属先が決まるまでの組織委員会とのやりとりについて、自らの責任において英語を使って行っている。この手続きの過程でも国際的に英語を使ってものごとを進める貴重な経験ができたといえる。

派遣のためのスケジュールは、リオへの航空便の予約がとりにくいという状況を考えて、オリンピック・パラリンピックへの旅行手配に実績のある大手旅行社と相談のうえ、オリンピックでのボランティアは原則として8月3日出発、23日帰国、パラリンピックでのボランティアは原則として9月7日出発、20日帰国と設定した。また、数は多くはなかったがオリンピックのあと2週間の期間をあけて宿舎などの移動を伴うが、さらにパラリンピックに継続参加できるというオプションが与えられ、それに応募したものが2名あった。原則、就職面接などよほどの事情がない限り、このスケジュールに沿うようにという条件を課した。出発前に説明会を経て事前研修を受け、帰国後はレポート提出、さらに開催される報告会に出席する、という条件を課していたが、その条件を満たすことができないが外国留学先から応募してボランティアとして参加したものが結果的に4名いた。オリンピックが3名、パラリンピックが1名、オリンピックからパラリンピックに継続参加が1名であった。

目的としては、当初よりこのように学生にスタディツアーという授業の枠組みのなかで「国際的な舞台で経験が積める場を与えること」「コミュニケーション能力を高めること」であって、通訳ができるようになるという目的を掲げていたのではなかった。実際募集に応じて最終的に授業の一環としてオリンピック・パラリンピックに出かけた学生24名のうち、言語文化学部が10名、国際社会学部が14名であった。男女別では、オリンピック派遣は全員が女子、パラリンピック派遣に男子2名と、本学の平均とてらしても女子の割合が圧倒的に多かった。なおスタディツアー以外での参加は逆に男子3名と女子1名であった。スタディツアーの参加者は、学年別には募集の時期が2月であったため、一年生は対象に出来ず就職活動に関わる3年生も応募しづらいということがあったためか、4年生5名、3年生6名、2年生が13名と、2年生が主体であった。専攻言語別では、複数名の専攻語として英語が6名、ポルトガル語が3名、スペイン語が4名、フランス語が3名であったが、アジア言語専攻の応募者もフィリピン語専攻2名であったが、他はインドネシア語、朝鮮語、中国語など多岐にわたっていた。ほかの属性でいちばん目立ったのはブラジル研究会所属の応募で5名ほどにのぼっていた。このことは、応募動機の中でブラジル文化にふれたいという動機をあげたものが多かったこととも合致する。筆者が以前に企画担当したKIPアメリカ研修経験者も2名含まれていた。

言語組み合わせとして、当初リオオリンピック・パラリンピック組織委員会から英語と韓国語、日本語とポルトガル語の組み合わせも提示されていたが、最終的には全員、英語ベースで活動することとなった。ポルトガル語ができるという参加者は4名、韓国語は1名にとどまった。

1.2. スタディツアーの事前研修

事前研修として、第一回の説明会を履修登録者 29 名に対して 4 月 29 日 6 限 (17:40~19:10) に行った。この説明会以後は、授業履修者に対する連絡は基本的に学務情報システムと言う学内の履修システムを通じて行った。原則として毎月最終金曜日の 6 限に説明会を行い、7 月に 2 回の半日研修を行うと予定が通知された。この時点では、リオオリンピック・パラリンピック組織委員会との面接は全員終了していたが、まだ **security clearance** が出ておらず従って配属先が決まっていない者もあった。第一回説明会では、授業担当者である筆者より言語ボランティアの心構えについてと、大手旅行社からの航空券手配と現地事情についての説明を行った。そのほか、リオオリンピック・パラリンピック組織委員会からの伝達事項としてユニフォームの支給、宿舎の手配や勤務の体制が 6 日勤務のあとは一日休みであること、勤務時間の食事については支給されるがそれ以外は自己負担であることなどの説明をした。資料としては、東京外国語大学論集第 89 号に出ている授業担当者の執筆した「多数国・地域が参加するイベントに向けた大学における通訳教育の試み」を参照するように伝えた。

次の説明会は 5 月 20 日 6 限に、ロンドンから来日中の西川千春氏の同席の下に開催した。5 月 18 日に都内で開かれた笹川スポーツ財団主催、リオ 2016 に参加する 4 名による講演会のために来日しており、履修者の中にもこの講演会に参加したものもあった。西川氏から大会の「顔」となるのがボランティアである、誇りをもって参加するようにとのお話があった。リオ 2016 ではボランティアのおよそ 2 割が外国人と見込まれるが、その中でも次の夏季オリンピックの開催地である日本から参加する日本人ボランティアは特別な存在として期待されるという指摘もあった。オリンピックでの共通言語は英語であり、通訳に関しても英語が基軸言語となること、事前のトレーニング資料も英語で配布されており、**portal** サイトからトレーニングが行えるように設計されている。ボランティア参加の条件として **Diversity** についてのトレーニングを受けるようにと指示がされた。また、フェイスブック (FB) 上にある **Rio 2016 Japanese Volunteer** のコミュニティーに参加することで情報が得られるなどのヒントがもたらされた。現地の事情をリアルタイムで知る上でも、このコミュニティーは活用されることとなった。

6 月 24 日金曜日の 6 限に説明会を実施、旅行会社を通じての現地の事情についての説明、留学生課からの海外で安全に過ごすための情報などを伝えることを徹底した。このときには各自の配属や宿舎についての情報もわかっていたため、具体的にどのように **BRT** とよばれる公共交通機関を用いて配属先から移動するにはどのように行うか、など説明を受けた。

オリンピックでは略語が多用される。どのオリンピックでも同じ共通略語、たとえば **MPC** は **Main Press Center** でメインプレスセンター、**OLV** は **Olympic Village** オリンピック村の略、**OBS** は **Olympic Broadcast Service** オリンピック放送サービス、**ONS** は **Olympic News Service**

オリンピックニュースサービス、OAS は Olympic Aquatics Stadium オリンピック水泳競技場というのは共通している。また、リオオリンピックでは競技場の場所の名前からつけられた配属先として、例えば CA2 Carioca Arena 2 (carioca はリオ市民を指す名称、ここは柔道やレスリングの行われる競技場)、RC3 Riocentro 3 で卓球の競技場、RC4 Riocentro 4 バドミントン競技場、ROA Rio Olympic Arena 体操、新体操、トランポリン、ROV Rio Olympic Velodrome 自転車、などである。

7 月には予定されていたとおり 3 コマ分の授業を 2 日間にわたって行った。7 月 14 日および 7 月 22 日の 3 限から 5 限 (12:40-17:30) である。基本資料は、前述の東京外国語大学論集 89 号掲載の「多数国・地域が参加するイベントに向けた大学における通訳教育の試み」に紹介しているインターネットのサイトを利用した。ORCIT Tutorial (Online Resources for Conference Interpreter Training) および Interpreting Asia-Interpreting Europe である。リオオリンピック組織委員会が用意して、ボランティアにインターネットで閲覧できるようにされた研修用の資料をもとに、どのように円滑なコミュニケーションの促進をはかるのかを頭に入れた。参考までにリオオリンピック・パラリンピック組織委員会が用意した資料の項目を記す。1. Training objectives 訓練の目的 2. Language Services ランゲージサービスズ (LANS) 3. Your role ボランティアの役割 4. Interpretation techniques 通訳テクニック 5. What if... 突発事態の対処法 6. Press conference 記者会見 7. Closing 終わりに、とあり LANS 言語支援での役割を果たすにはどのような心構えが必要かを述べている。

7 月 14 日はこれをもとに、オリンピックファミリーとよばれる、国際オリンピック委員会 (IOC) のメンバーや各国のオリンピック委員会 (NOC) 王室関係者やスポンサー関係者とはどのような人たちなのか、どのような場面での通訳が予想されるのか、通訳をする上での基本的な心構えを講義した。メインプレスセンターや、オリンピック村に配属される場合は、日本人大会関係者と現地関係者とのあいだで生じる様々なコミュニケーションの円滑化の役割が求められる。オリンピックの場面では、専門職の通訳者とボランティアの間での役割は、明確にわけられているが、言語ボランティアがマスコミやオリンピックファミリー関係者や来場者への案内が求められる場合があり、そういう場合に対応できるように研修を行った。受講者を二人一組として、まずはインタビューをする側、される側を決めてロールプレイをするということを実践した。Interpreting Asia-Interpreting Europe は、一つが 20 分ずつの全部で 7 のユニット (1. Role of the interpreter 通訳者の役割 2. Public Speaking パブリックスピーキング 3. Concentration and Memory 集中力と記憶力 4. Note taking ノートテイキング 5. Coping tactics 対処法 6. Cultural Awareness 文化面の意識 7. Professionalism 専門性から成り立っているが、授業では簡単な説明をするにとどまったため、次回の 7 月 22 日に全部の 7 ユニットの動画を見

での感想を提出するとの課題を出した。通訳をする場合には、三人称ではなく一人称で話すこと、聞いている人とのアイコンタクトを大切にする、集中して大切な情報を性格に伝える、すべてをメモしようとしなくて、ノートはあくまでも補完する役割であること、文化の違いを理解すること、立ち位置や機密情報の扱いにも気を配るなど、態度にも注意が必要であるということ、万全の準備はできないまでも、自信をもって大きな声ではっきりと話す、わからないことはわからないと言う、話し手の立場からメッセージを伝えることなど、感想文からのフィードバックを得て受講している学生が重要な点を理解しているという確認ができた。

7月22日は、ブラジルのリオ州立大学留学から一時帰国していたポルトガル語専攻4年生から、現地事情を聴くことをまづ行なった。そのあとで、ベルジュロ伊藤宏美・鶴田知佳子・内藤稔著の『よくわかる逐次通訳』（東京外国語大学出版社）を参考書として使用しつつ、リオオリンピック組織委員会資料をもとに、三つの通訳におけるステップの実際を、なぞった。三つのステップとは、1.Listen & Understand 聴解し理解する 2.Take Notes & Remember メモをとり記憶する 3.Interpret & Communicate 通訳しコミュニケーションをする、である。大きな国際大会の試合後のインタビュービデオをネット上から探してきて、この三つのステップを実践した。競技を終えたあとの選手へのインタビュー場面について、ウェブ上での動画をもとに、ノートテイキングの基本を含む逐次通訳の練習を行なった。

2. 運営上の問題と対応策

2.1. 治安対策と安全管理

ボランティアとしてスタディツアーの受講学生として参加が決まった者について、スケジュールは安全対策を考えて、一定のスケジュールのもとで集中管理することになった。また、スタディツアー外の学生にしても、リオオリンピック組織委員会側からみれば東京外国語大学の学生であるとみなされることには変わりがないとの判断から、空港から宿舎への移動などの手配については、極力同じ行動ができるように考えた。安全対策としてオリンピック、パラリンピックともに関連する配属でグループをつくり連絡責任者を定めた。緊急のときに大学と連絡をとれ、学生一人ひとりの安全確認ができる体制は留学生課の安全管理システムを通じて整えた。

オリンピックのボランティア17人の配属先は、Rio Centro Precinct といって4競技でプールされる場所に配属された者2名ほか競技場に配属が全部で11名、競技場以外がメインプレスセンター4名とオリンピック村2名の6名であった。パラリンピックのほうではメインプレスセンター3名とオリンピック村2名の5名が競技場以外、競技場配属が4名であった。

そんななかで、特にまずは懸念が高かったのが現地の治安状況である。滞在中に宿舎は確保

されていた。しかし治安状況が心配な中、大学の方針として外出を制限したため、学生は食料を調達する必要があった。ボランティアとしての勤務は原則 6 日勤務、一日の勤務は最大 8 時間まで、であり 6 日勤務の後に一日休日が与えられる。勤務日については食事の供与があるが休日についてはそれが無い。また、競技会場によってはメダル授与式が夜遅くに行われることから勤務が深夜に終わることもあり、宿舎への帰宅に懸念があった。食料調達や宿舎への送りについていちばんの安心材料の提供となったのは、リオ州立大学の中に設けられた東京外国語大学の Global Japan Office の協力である。Global Japan Office のコーディネーターは、空港での出迎え、ユニフォームと ID の受け取りに行く際や、食料調達の付き添いを引き受けてくれた。宿舎に帰る時間が遅くなった場合の送迎などのほか、大会期間中その後何件も寄せられることになったマスコミからの取材依頼についても、引率教員の同行がなかったなかで学生が安全に過ごすための目配りを行った。さらに、紹介者の西川千春氏をはじめリオオリンピック・パラリンピックに参加した社会人の日本人ボランティアが学生を見守ってくれた点がたいへんありがたかった。社会人ボランティアの方々の後ろ姿から、将来の自分のお手本と考えた学生もあり、学生が他のボランティアから多くを学んだと思われる。このように多くの学外の人からのサポートがあった。

もう一つ、懸念された問題は宿舎で学生が体調不良におちいる、あるいは盗難にあうという事態であったが、幸いなことにいずれも大きな問題になるような事態は発生しなかった。

2.2. ボランティア通訳とは

「ボランティア」「通訳」の意味についてクローズアップされるに至った経緯があった。前述のようにそもそもの授業開設の動機は、学生に他では得がたい経験を与える機会を提供するところにあったが、「ボランティア」「通訳」ということばが独り歩きして世間の理解とずれが生じていると気づかされる面があった。「通訳ボランティア」へのハフィントン・ポスト日本版での 2016 年 7 月 8 日付記事から待遇の悪さを問題とする反響がインターネット上でも広がった。

ボランティアとは何か。厚生労働省はボランティアについて明確な定義を行うことは難しいと前置きしながらも、「一般的には『自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為』を指してボランティア活動と言われており、活動の性格として『自主性(主体性)』、『社会性(連帯性)』、『無償性(無給性)』等があげられる。」としている。このような定義があるが、実際にはボランティアに対するイメージには個人間で幅がある。基本的にはボランティアの根幹は、一部には交通費などの実費程度を出すボランティアもあるが自主的に社会のために無償で行うというものだが、ボランティアとは何かの理解が食い違っていることでこのような論争になった。

通訳とは何か。オリンピック・パラリンピックにおけるボランティア通訳とはどのような行

為であるのか、あらためて振り返る。通訳ボランティアとは、Language Services Team (LANS) と呼ばれる言語支援チームとして採用される。LANS のミッションは以下のとおりである。

Language Service's mission is to promote communication between the Olympic and Paralympic Family and the various functional areas of Rio 2016, such as Press Operation, Doping Control, Broadcast, Sport, Medical, among others

- ・ Language Services provide professional simultaneous and consecutive interpretation services in up to ten different languages (English, French, Portuguese, Spanish, Arabic, Chinese, Japanese and Korean) for Press Conferences, all official Meetings and Sessions at the Olympic and Paralympic Games
- ・ Language Services also provide volunteer interpreting services in over twenty languages (Rio 2016 ボランティア研修資料)

LANS の使命は、オリンピック・パラリンピックファミリーと、リオ 2016 年大会の各機能別の分野であるプレス、ドーピング・コントロール、放送、スポーツ、医療などのコミュニケーションを推進することにある。

LANS は専門家の同時通訳と逐次通訳を 10 の言語（英語、フランス語、ポルトガル語、スペイン語、アラビア語、中国語、日本語、韓国語）について、オリンピック・パラリンピックの記者会見、すべての公式会合や部会において提供している。

LANS はさらに 20 ヶ国語以上においてボランティア通訳サービスを提供している。
(筆者訳)

さらに同じくリオ大会でのボランティア研修資料から引用するが、ボランティアと専門職の通訳者の役割は次のように区別されている。

- ・ As a rule, professional interpreters will be used for press conferences. However, if one's not available, a volunteer may be asked to assist.
- ・ Both the volunteer and the venue press manager would have to agree with the volunteer participation.

原則として、専門職の通訳者は記者会見において用いられる。しかし、専門職の通訳者が手配できない場合にはボランティア通訳者が助力を求められる場合がありえる。

ボランティアおよび会場のプレス担当マネージャーが、ボランティアの起用について同意している必要がある。

(筆者訳)

このように、専門職の通訳者とボランティア通訳者は明確に活動する場が分けられている。その限りにおいては、ボランティア通訳者は専門職の領域をおびやかすという存在ではない。

このように求められていたのは言語支援部門である LANS(Language Services) チームの一員としての言語支援である。2016 年 8 月 3 日にリオに出発する直前の 8 月 2 日付読売新聞夕刊に、「大学生 リオで助っ人通訳」とする記事が掲載されているが、そこで引用されている、前述のリオオリンピック組織委員会言語支援部門のフェルナンダ・ポルト氏のことばとして、「コミュニケーションは国際的イベントが成功するかどうかのカギで、大会では通訳ボランティアが大きな役割を果たす。選手らの声を世界に伝える学生の協力には、大いに感謝している」とある。

大会によっては、言語支援ボランティアと通訳業務担当ボランティアを明確に区別して募集をした場合もあった。2010 年のバンクーバーオリンピック・パラリンピック冬季大会では、語学ボランティアの選抜には外国語能力基準としてヨーロッパ言語共通参照枠 CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) が用いられた。一般的に言語支援に必要とされるレベルは B2 と考えられているが、通訳を行うボランティアには熟練した言語使用者である C1、C2 レベルの言語能力が求められるとされ、バンクーバー大会においては、通訳を行う部門とそれ以外の言語サポートを行う部門に分けて採用していた (Rehorick, Johannsdottir, Parent & Patterson, 2011)。CEFR の各レベルの対応技能については、以下の表のとおりである (出典 : Global Communication & Testing (2014)「CEFR『ヨーロッパ言語共通参照枠』って？」)

表 1：共通参照レベル (Common Reference Levels)：全体的な尺度

熟練した言語使用者	C2	聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細なテキストを作ることができる。その際テキストを構成する字句や接続表現、結束表現の用法をマスターしていることがうかがえる。
自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。お互いに緊張しないで母語話者とやり取りができるくらい流暢かつ自然である。かなり広汎な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。
	B1	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人的情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合い、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら、簡単なやり取りをすることができる。

しかし、今回のスタディツアーの対象であったリオオリンピック・パラリンピックではバンクーバー大会のように通訳担当部門として言語支援部門と分けて採用されたのではない。さらに言えば、すでに 2016 年 11 月に公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会から発表されている「東京 2020 大会に向けたボランティア戦略(案)」をみても、応募条件に「英語やその他言語のスキルを活かしたい方」とあるが、通訳担当部門として分けてはいない。

日本通訳翻訳学会では、すでに 2005 年にボランティア通訳者と専門職の通訳者の分担についてのパネルディスカッションが行われており、この二つには線をひくべきであるという意

見が明確に出されている(田中・水野 2005)。また、筆者が所属する国際会議通訳者協会においては、専門職であるべき通訳者が無料の労働力として搾取されるのを避けるため、2016 年 7 月 5 日に *Guidelines for Student Internships in Conference Interpreting* として、インターンというかたちにおける無償で通訳を提供する場合について細かな規定を設けている。これによれば、非営利組織において先輩通訳者がいる同じ場において先輩通訳者のパフォーマンスを見聞できるという場合に限られている。オリンピックなどのスポーツ大会における通訳行為は会議通訳の場面とは同じではないので、この見解がそのままあてはまるというわけではない。また、欧米の通訳・翻訳大学院において通訳・翻訳の指導をする教員の中には、たとえば 2016 年 7 月 18 日に神戸女学院大学において行われた講演の質疑応答のときに会場からのボランティア通訳の質問に対して、どんな場合でも無料で通訳を引き受けてはいけないという考え方も一部では存在する。とはいえ、筆者の考え方としてはどんなに優れた教師でも「経験」を教えることはできない、という立場から、専門職とボランティアの担当を分けるとの条件のもとでは、学生に学びの場を提供することは有益であるとする。ただし、専門職が行うべき仕事まで安易にボランティアに依頼されることがないように、注意が必要であるのはいうまでもない。

3. 達成された成果

リオスタディツアーの最終レポートとして、以下 3 点について A 4 用紙 3 枚程度で作成することとして学生にレポート提出を課した。

- (1) 事前に個人として掲げた達成したい目標：その中で出来たこと、出来なかったこと
- (2) 実際にボランティアを行い学んだこと：気づいたことおよび反省点
- (3) 今回のボランティアが、今後自分の考えている勉強・仕事にどう影響するか

このレポートから達成した目標、達成できなかったこと、さらに自分の今後の進路(進学・就職の両方を含む)を考える上で(直接・間接に)役立った、という三つに整理して抽出した。

その結果、いちばん多くが指摘したのが自分の今後の進路を考える上で役立ったという点で、24 名中 18 名がそう指摘した。たとえば「キャリアをみすえて、大規模な国際組織で働く上でどんな力が必要なのかみることができた」、という意見が出されている。

達成できた成果として大きく上げられるのが、現地でオリンピックならではの場で仕事をするという経験を得ること(24 名中 11 名)であり、たとえば「国際的なイベントの運営の裏側を見て、次の東京オリンピックでの活動につなげるのを期待して参加したが、想像していなかったほど収穫が大きかった」という意見があった。

目的としてあげたが達成できなかったことの一番は、通訳を行う場が期待したほど得られなかったことであった(24名中10名)。理由はいろいろとあるが、配属された競技場では日本人選手の活躍がなかったなどの理由で出番が回ってこなかったことや、マネージャーとのコミュニケーションや理解不足があったこと、「指示待ち」ではなく積極的に動く必要があったことなどが挙げられる。

ほか、10名以上があげたのは、通訳についての気づきや学びがあったとする点である。たとえば「正確に訳す、ということは発話者の言う内容の意味をくみとって、メモを的確にとりプレッシャーに負けず伝えることであるが、最終的にはこの目標に近づけた」とする意見である。

他に多かった意見としては、英語やポルトガル語を使うなど語学力を高めることができた(6名)、世界の人と交流して異文化を知ることができた(5名)、ボランティア運営について学んだ(5名)であった。達成できなかったことで意見をあげたのは運営についての提言でモチベーションの維持やリーダーの選出の仕方について触れたものも含めて8名があげた。英語以外の多言語がオリンピックの場では必要だと痛感して専攻語へのモチベーションがあがったとするものが5名、オリンピックにおいては積極性や文化理解が必要であるがその点が足りていなかったと言う自覚が5名から寄せられた。

2016年10月14日6限(17:40~19:10)に227教室において「リオスタディツアー報告会」を開催した。学内外から100名以上を集めた。東京オリンピック・パラリンピック組織委員会から有識者が出席していた。当初は報告会を学外にも公開することは考えていなかったが、参加学生の間から自分たちの達成した成果を2020年東京オリンピック組織委員会の人たちに提言として聞いてもらいたいという要望があがった。そこで、外部においても成果を公表する機会として報告会が設けられることとなった。

この報告会について「私たち、リオ五輪言語ボランティアに参加しました」としてまとめられたTUFSTodayの記事から、以下引用する。

積極性・自己アピールの大切さを実感した。主体的に積極的に動かないと仕事は回ってこない。異文化理解の大切さや、文化の違いを尊重する心が大切であることを感じた
コミュニケーション能力や洞察力など語学力以外の大事なことを改めて感じた
多国籍のチームで働くことの困難、例えば時間感覚の違いや協調性を経験した
仕事は行動力と熱意次第であること、日本とは異なる働き方があることを感じた
事前準備・調査を徹底することの大切さを実感した
ボランティアの存在の重要性を感じた

自分の将来を考える上で、とても大きな転換点になった
オリンピックという特殊なイベントにその一員として関わったことによって自信が生まれた
「将来自分もこの人のようになりたい」と思える人にたくさん出会った

上記のように、概ねリオスタディツアーの報告書に学生が指摘していることと一致している。
各自、ボランティアおよび言語支援として成長する一助にしたことが伺える。

また以下に筆者訳で示すように、リオスタディツアーとしての参加学生の面接を担当し、大会期間の LAN マネジャーの一人でもあったフェルナンダ・ポルタ氏のコメントを掲載している。筆者の求めに応じて学生への全般的なコメントを寄せてくれたが、真摯に自分のできることを臨機応変に行う努力を傾けたことが評価されたとわかる。英語の原文は付属資料に示す。

「東京外国語大学からのボランティアはみな礼儀正しく親しみやすかった。みな、リオにオリンピック・パラリンピックのために来ることを大いに感激していたのは明らかで、この機会を最大限に活用したといえる。

「個人的には MPC(メインプレスセンター)のチームが日本人ジャーナリストの助けになるということで、たいへん貢献したと思う。主としてメインヘルプデスクに駐在して道案内、装備、リクエストを出す、不平の申し立てなどすべての問題への対応を手伝った。

「各会場においては、学生は日本人スポーツ選手やジャーナリストのために必要な場合にミックスゾーンにおいて通訳を行った。英語能力はまちまちであったが、もっとも英語能力が高いとみなされた者に多く通訳機会が与えられた。あるいは、たまたま都合よく必要とされる場に居合わせたことで通訳依頼があった者もある。活動があまり必要とされていないときには他の業務、たとえばアクセスコントロールなどの業務の支援を要請される場合があった。LAN においては業務が発生するまで待ち時間が発生することもあるが、東京外国語大学の学生で待ち時間についての苦情を言った者はいなかった。」

公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が 11 月 13 日に開催した TOKYO2020 公認教育プログラム「大学連携 学生のための Rio to Tokyo」において、リオオリンピック・スタディツアー参加学生が発表を行った。組織委員会のウェブサイトでは、次のように紹介されている。

大会ボランティアに参加した東京外国語大学の学生の皆さんは、リオで支給されたボランティアユニフォームを着て登場し、「世界各国から集まる様々なバックグラウンドを持った人たちが、1つのチームとなって、ボランティア活動を行うためには、文化の違いを認識する必要がある。チームの一員として、積極的な自己アピールも大事です。」とリオ 2016 大会の経験

を通して得た感想を述べました。イベントに来場された方々は、学生の皆さんが披露した滞在中の様々なエピソードに、感嘆の声を上げていました。

上述のように、リオオリンピック・スタディツアーの成果の発表は学内にとどまらずに学外でも披露されている。

おわりに

大学として、スタディツアーという授業の一環で、オリンピックにボランティアを派遣するという今回の試みは、出発前から学内外に反響を呼んでいた。東京外国語大学が授業としてオリンピックに通訳ボランティアを派遣することは、リオ大会が始まる前において毎日新聞の6月7日付記事、読売新聞の8月2日付記事、福井県出身の学生をとりあげた8月20日付福井新聞の記事、期間中のリオの会場におけるNHKやフジテレビをはじめとするテレビ番組の取材にとりあげられた。

学生がスタディツアーを終えて帰国してから、上述のTOKYO2020公認教育プログラム「大学連携 学生のための Rio to Tokyo」において、リオオリンピック・スタディツアー参加学生が発表するなど様々な場面で協力を要請されている。民放のニュース情報番組への出演、代田ボランティアビューローから「東京オリンピックに向けてのボランティアを考える」、という企画への学生の派遣の要請もあった。通訳・翻訳関係の出版物である「通訳者・翻訳者になる本 2018」(イカロス出版、2017年1月)に、オリンピック派遣とパラリンピック派遣の学生が一人ずつ、寄稿している。オリンピック・パラリンピックについての具体的な生の声での「語り」をする役割を期待されている。

実際にリオで日本語を用いるボランティアをした人の合計がおよそ50名と言う中の過半数が東京外国語大学の学生であったことから、存在感が大きかったことは間違いない。学生にしても、必要とされていると言う実感が得られた場合には達成感が特に大きかった。

以上みてきたように大会派遣前、期間中、大会終了後も注目を集めたスタディツアーとなったが、担当者として主に二点を指摘したい。一点はスタディツアーの運営に関して、もう一つは通訳を教える上での大学の担当者としての考えである。

リオオリンピック・スタディツアーはすでに枠組みとして危機管理などについての十分な安全対策まで考えたスタディツアーの枠組みがあったこと、Global Japan Officeなど東京外国語大学の国際的な展開の基盤があったからこそ、運営が可能となった。今回のように知人から学生にとって有益な情報がもたらされたからといっても、このような土台がないところでは、スタディツアーは一担当者のみで実施出来ることではない。筆者は、リオオリンピック・スタディ

ツアーは英語を使って多国籍の現場で仕事をした体験という要素を強調したい。教室内での講義やディスカッションにとどまる学びではなく、ブラジルで開催されたオリンピックといえども、基盤となっていたのは英語である。国際共通語の英語を使いながら世界の様々な国から来ている人々とコミュニケーションをはかることができた、という実体験が貴重であったと、学生のレポートを振り返ることであらためて認識できた。

次に、現役の通訳者でもあり大学・大学院で通訳を教えている通訳教育担当者としての筆者の視点からは、2020 東京五輪に向けての関心の高さを再認識したとともに、語学習得の上でもっとも大切であると言っても過言ではない、学習の動機(モチベーション)において、2020 東京オリンピック・パラリンピックを念頭におくことが有効であるとの手ごたえを感じた。募集段階から、2020 東京五輪があるからこそ応募したい、2020 東京五輪でボランティアをしたいから応募したという声が多かった。一方では、通訳の勉強をしたことがない学生が大半であった。通訳とはどんな役割を果たす職業であるのか、についての認識も参加した学生のあいだでは広めることができた。専門職として通訳を目指すというのでは必ずしもなくても、本学の卒業生であれば就職先での業務の一つとして、通訳・翻訳に関わる業務が与えられる可能性は高い。国際的な場でのコミュニケーションを円滑にすすめるためには、言語と文化の違いを乗り越えるために手を貸すことのできる人材の育成が求められる。その育成の一つのためのモチベーションの手段として、通訳教育担当者としては、今回のような多数国・地域が参加するイベントにおける言語支援にたずさわる経験を、授業の一環として与えることができたのは、幸運な機会であったと考えている。今後も、機会をとらえて機動的に学生の学習意欲を引き出すようなかたちでのスタディツアーの実施を行っていくことが、本学においてはふさわしいと考える。

参考文献・参考ウェブサイト

AIIC 2016

Guidelines for Student Internships in Conference Interpreting, 2017 年 4 月 23 日取得、
<https://aiic.net/page/7698/guidelines-for-student-internships-in-conference-interpreting/lang/1>

CEFR『ヨーロッパ言語共通参照枠』って？ 2017 年 5 月 3 日取得、
<https://gc-t.jp/news/20141022/140/>

Rehorick, S., Johannsdottir, K., Parent, M. & Patterson, D. 2011

Using the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) for Evaluating Language Volunteers for the Vancouver 2010 Olympic and Paralympic Winter Games. 2014 年 8 月 16 日取得、
<http://www.ecml.at/Portals/1/Rehorick%20CEFR%20for%20Language%20Volunteers%20at%202010%20Olympics%202011-10-29.pdf>

Yomiuri Shimbun 2016

“Rio 2016/Students pitch in.” The Japan News, August 02, 2016, 2017 年 4 月 21 日取得、
<http://the-japan-news.com/news/article/0003121148>

厚生労働省社会・援護局 地域福祉課 2007

「ボランティアについて」、2017 年 4 月 16 日取得、

http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf

産経新聞 2016

『『オリンピズム』つなぐ。

リオから東京へ(3) ボランティア教育は大変だ』産経新聞』2017 年 4 月 21 日取得、

<http://www.sankei.com/column/print/160616/clm1608160007-c.html>

鶴田知佳子 2014

「多数国・地域が参加するイベントに向けた大学における通訳教育の試み」『東京外国語大学論集』

第 89 号、pp. 301-325.

通訳者・翻訳者になる本 2018 イカロス MOOK 2017 年 1 月 28 日

「TUFS 留学案内 2017」

東京外国語大学 2016

『Globe Voice 2016』No 11、2017 年 4 月 19 日取得、

<http://www.tufs.ac.jp/abouttufs/doc/globevoice011.pdf>

東京外国語大学 2016

「リオスタディツアー報告会」、2016 年 4 月 16 日取得、

<https://tufstoday.com/articles/161104-2/>

東京外国語大学広報マネージメント室 2016

「私たち、リオ五輪言語ボランティアに参加しました」『TUFS TODAY』、2016 年 4 月 16 日取得、

<https://tufstoday.com/articles/161104-2/>

東京都・公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 2016

「東京 2020 大会に向けたボランティア戦略(案)」2016 年 11 月 18 日取得、

<http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2016/11/18/documents/13.pdf>

TOKYO2020 公認教育プログラム 2016

『『大学連携 学生のための Rio to Tokyo』開催レポート、2016 年 11 月 30 日取得

<https://tokyo2020.jp/jp/news/event/20161115-01.html>

西川千春 2016

「リオ五輪、ボランティア運営に関する問題(その3)」『オリンピックといえばボランティア』

2017 年 4 月 30 日取得、<http://blog.livedoor.jp/charlesnishikawa/archives/6680563.html>

福井新聞 2016

「リオで通訳奮闘、充実感いっぱい 初業務は競泳『銅』星奈津美」『福井新聞』2016 年 8 月 20 日、

2017 年 4 月 19 日取得、<http://www.fukuishimbun.co.jp/localnews/rio2016/102649.html>

毎日新聞 2017

「大学生通訳、ボランティア参加 東京へ懸け橋」『毎日新聞記事』2016 年 7 月 5 日、2017 年 4 月 23 日

取得 <https://mainichi.jp/sportsspecial/articles/20160705/k00/00m/040/085000c?mode=print>

水野真木子・田中深雪 2005

『プロの通訳者とボランティア通訳者——その折り合いをどうつけるか 通訳教育とコミュニティー通訳の現場から考える』通訳研究、2005 日本通訳学会 pp.311-325

吉川慧 2016

「東京外語大が学生ボランティアをリオオリンピックに派遣 ネット上で『待遇が悪すぎる』と批判の声」『The Huffington Post』2017 年 4 月 19 日取得、

http://www.huffingtonpost.jp/2016/07/07/rio-volunteer-tufs_n_10873796.html

読売新聞 2016

「大学生 リオで助っ人通訳」『読売新聞』、夕刊 12 面 2016 年 8 月 2 日

付属資料 リオオリンピック組織委員会フェルナンダ・ポルト氏からのフィードバック
(2017 年 3 月 21 日付け私信より)

The volunteers from TUFs were all very polite and friendly. They were obviously extremely excited to be in Rio for the Olympic and Paralympic Games and I think they made the most of it.

東京外国語大学からのボランティアはみな礼儀正しく親しみやすかった。みな、リオにオリンピック・パラリンピックのために来ることを大いに感激していたのは明らかで、この機会を最大限に活用したといえる。

I personally observed the team at the MPC who were very helpful when it came to assisting the Japanese journalists. They were mainly stationed at the main help desk and helped them with directions, equipment, make requests, make complaints... anything and everything really!

個人的には MPC(メインプレスセンター)のチームが日本人ジャーナリストの助けになるということで、たいへん貢献したと思う。主としてメインヘルプデスクに駐在して道案内、装備、リクエストを出す、不平の申し立てなどすべての問題への対応を手伝った。

At the venues, students interpreted for Japanese athletes and journalists in the mixed zone when they were needed. They had varying levels of English and those who were more proficient may have had more chances to interpret (or those who were in the right place at the right time). There were some periods of inactivity when they were asked to help with other tasks (for example, access control). Language Services volunteers often have to wait until their service is needed but none of the TUFs students complained about this.

各会場においては、学生は日本人スポーツ選手やジャーナリストのために必要な場合にミックスゾーンにおいて通訳を行った。英語能力はまちまちであったが、もっとも英語能力が高いとみなされた者に多く通訳機会が与えられた。あるいは、たまたま都合よく必要とされる場に居合わせたことで通訳依頼があった者もある。活動があまり必要とされていないときには他の業務、たとえばアクセスコントロールなどの業務の支援を要請される場合があった。LANにおいては業務が発生するまで待ち時間が発生することもあるが、東京外国語大学の学生で待ち時間についての苦情を言った者はいなかった。(筆者訳)

